

カバ園長の おもしろカバ日記

西山登志雄



園長の おもしろカバ日記

西山登志雄



コビトカバを^だ抱く^{ちよしや}著者。



コビトカバの赤ちゃん

ポプラ・ノンフィクション②③

^{えんちよう}
カバ園長のおもしろカバ日記

発行 1985年11月 第1刷©

著 者 西山登志雄（にしやま としを）

発行者 田中治夫

発行所 株式会社 **ポプラ社**

〒160 東京都新宿区須賀町5

振替 東京4-149271

印刷 株式会社須藤印刷

製本 富士製本株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。
N.D.C.916

Printed in Japan

ISBN4-591-02092-4



はじめに

ボクとカバとは、カバが戦後^{せんご}はじめて上野動物園^{うえのどうぶつえん}にやってきて、すこしたってからのおつきあい^{おつきあい}で、三十年間^{さんじゅうねん}いっしょに暮^くらした。

それまで、ラクダにはじまって、クマ、ライオン、水鳥^{みずとり}などの飼育^{しいく}を担当^{たんとう}したが、カバとのつきあいが一番長^{ばななが}く、また何^{なに}よりもたくさん勉強^{べんきょう}した。

ボクはカバが大好き^{だいすき}なんだ。ボクは、カバにいろんなことをおしえてもらって、これまでやってきた。

だから、ボクの人生^{じんせい}は、カバとの交流^{こうりゅう}なしには語^{かた}れないのである。ボクがカバに学^{まな}んだことや、カバの親子^{おやこ}の愛情^{あいじょう}、ふしぎな生態^{せいざい}など、ボク自身が体験^{たいけん}したことを、キミたちに伝えたい^{つた}と思って、この本を書いた。

これを読^よめば、もうキミたちは立派^{りっぱ}な「カバ博士^{はかせ}」だよ。

もくじ

はじめに

プロローグ ボクはカバが大好きだ

6

デカオのウンチ 9

ザブコが赤ちゃんを産む 37

カバってどんな動物 93

ザブコが死んだ 110



コビトカバがやってきた

あとがき

137



表紙写真

『週刊平凡』協力
撮影・色部昭子

カバ園長の えんちよう おもしろカバ日記



デカオ。ボクがとった写真の中で最高作品。
しんじん なか さいこうさくひん

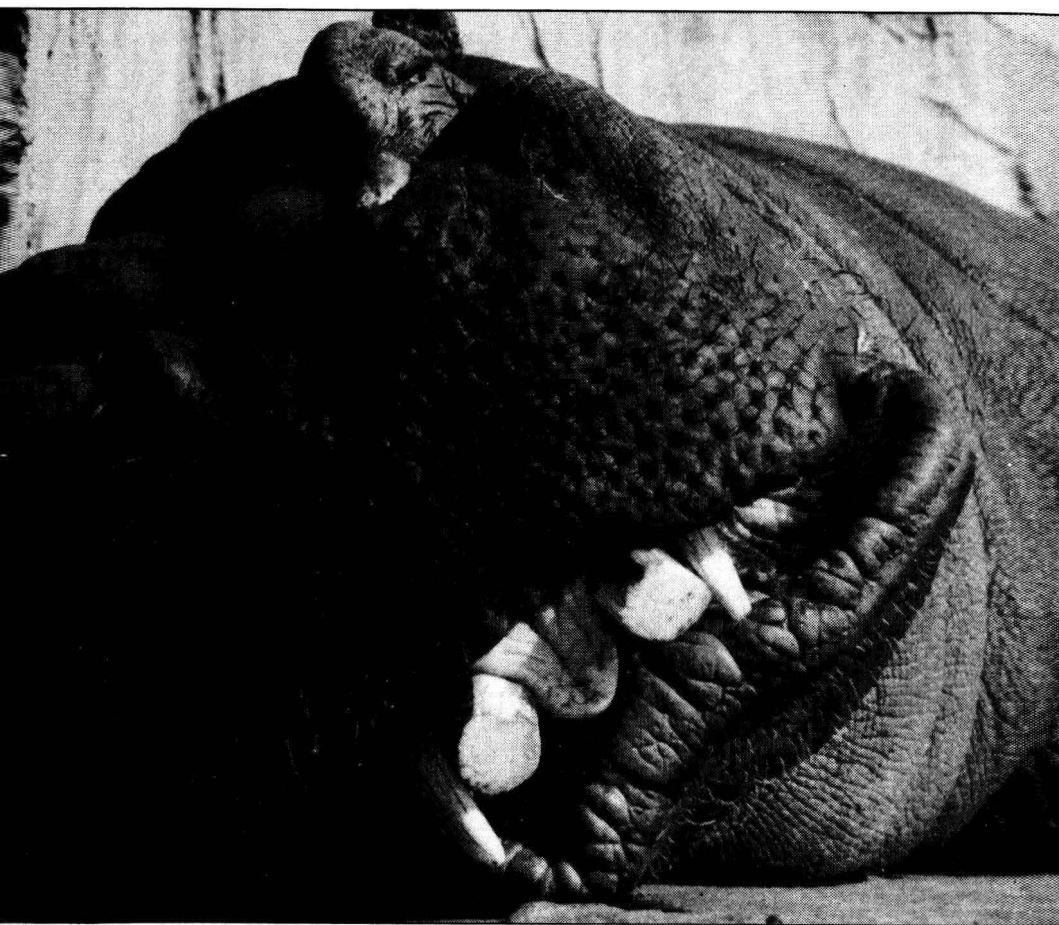
プロローグ
ボクはカバが大好きだ

カバはゆたかでユーモラス

カバをグロテスクだと感じる人は、カバがあまりにでかいからであろう。反対に、カバをユーモラスだと感じる人は、カバがヅタに似ているからではないだろうか。

でかいといえは、カバは、陸上にすむ動物ではゾウにつぐ巨漢である。体重は三トンから四トンもある。だから、どんな猛獣でも相手になることをあきらめる。カバには敵がなく、その寝相はいかにも平和そのものだ。群れをなしているも、みんなベツタリとくつついている。うらやましいぐらいで、グロテスクとユーモアがまざって、とても奇妙に見える。

ボクはそんなカバに、なんとなくゆたかさを感じる。あの体を維持しているだけでも、たいへんな芸術だと、キミたちは思わないかい。



ひるね しゃしん ざっし にゅうせん
昼寝するデカオ。この写真はドイツのカメラ雑誌のコンテストに入選する。

子どもの言葉遊びでは、カバはバカの反対だから、利口ということになっている。ほんとうは、体にくらべて脳が小さすぎ、夜、沼からあがって草を食べにでかけたときなど、とちゅうで雨でもふると、足あとがけされて帰り道がわからなくなり、まごまごすることがしばしばなのである。しかし、カバはカバでそれでいいのである。

夏はプールで、冬はあったかなところで昼寝ばかりしている。プールからあがると、暑い日ざしをさけて涼しいところでグウーと体をリラックスさせる。なんともうらやましい姿。そんな姿から、鈍重でスローモーな動物と思われる。しかし、開園前や閉園後の生活をみているとそうでない。早朝などは、イキイキとした動きを見せてくれる。親と子の関係なども、かなりきめ細かく、べつたりしているがいやらしくない。ほかの多くの動物たちとくらべても、けっして見劣りしない。子に対する愛情も、ネズミ、ウサギ、イノシシなどとはかなりちがう。実によく面倒をみる。だから、「カバは逆立ちしなくともやっぱりバカだ」という言葉には、ボクは、あきれて怒りさえおぼえる。

デカオのウンチ

アフリカの動物たちがやってくる

太平洋戦争たいへいようせんそうがおわってからしばらくのあいだ、日本はひどい状態じようたいであった。東京や大阪などの大都会だいてかいにはヤミ市いちがたち、人びとの心もすきみがちだった。それはどこの動物園もおなじであった。

ボクがはいったところの上野動物園というのは、動物園といっても、ラクダやブタ、ニワトリ、アヒルなどがあるだけで、野生動物やせいどうぶつといえるものはほとんどいなかった。本当にさびしい動物園どうぶつえんだった。

動物園のスターはなんといってもゾウさんだ。そのゾウがいないのだから、動物園とは名ばかり。口のわるい人などは、“上野のブタ園”くちってわる口をいう。くやしけど仕方しかたがない。事実じじつ、ブタがたくさんいたのだから。

それを聞いたインドのネール首相しゅしやうが、日本の子どもたちにと、インドゾウ「イ

ンディラ」をプレゼントしてくれた。

昭和二十四年九月二十四日、インディラは東京芝浦港から歩いて動物園へ入園した。沿道では東京の子どもたちから大歓迎をうけたんだ。

昭和二十七年になって、上野動物園では開設七十周年を祝って、さまざまな催物をおこなった。

その一つに、アメリカからライオンショーがあった。クレメンツというライオンの調教師がリーダーだった。ボクは、このショーにラクダをつれて出演していた。

そうしたら、クレメンツがボクを気にいってくれて、ある日、突然、言った。「ニチー、お前をオレの弟子にする」

ニチーというのは、ボクの名前だ。外人にはニシヤマは言いにくいのだ。こんなことがあって、ボクはクレメンツについて、まる一年、ライオンの調教師を習ったり、彼の身のまわりの世話をしたりした。

クレメンツは厳しい先生であったが、ボクは彼からとても大切なことを学んだ。

それは、野生動物やせいどうぶつを飼うかということが、いかにむずかしいかということや、職業しよくぎよう人としての動物どうぶつに対する接しせうかたなどであった。

ゾウやライオンがやってきても、まだまだ野生動物やせいはすくなく、さびしいかぎりであった。

しかし、その同じ年おなとしに、戦後せんごはじめて、大量たいうりようのアフリカの動物たちが上野動物園とうじにやってくることになった。開設七十周年事業かいせつ しゆうねんじぎようの一環いつかんであった。

当時の飼育課長とうじ しいくかちようがアフリカ現地げんちまでわざわざ出むいてつれてきたのである。それまで目玉めだまらしい目玉のなかったときに、カバ、サイ、キリン、シマウマなど二十数頭すうとうもの野生動物やせいどうぶつがやってきたのである。これで、上野ブタ園はやっと上野動物園とうじどうぶつになった。

横浜港よこはまみなとにアフリカの動物たちが到着とうちやくした。港で検えけんきにはいった。もう、ボクら動物園の飼育係しいくがりは、ソワソワしておちつかなかった。うれしいのだ。やっと、動物園が動物園らしくなる。そんな思いでいっぱいだった。クレメンツの動物ショー

が終わりにかけていたボクだって、晴がましい気持ちだった。

しばらくして、検査きをおえた動物たちは、昭和二十七年七月、八月の二回にかわって、ぞくぞくと動物園へはいつてきた。カバの夫婦は八月二日にやつてきた。

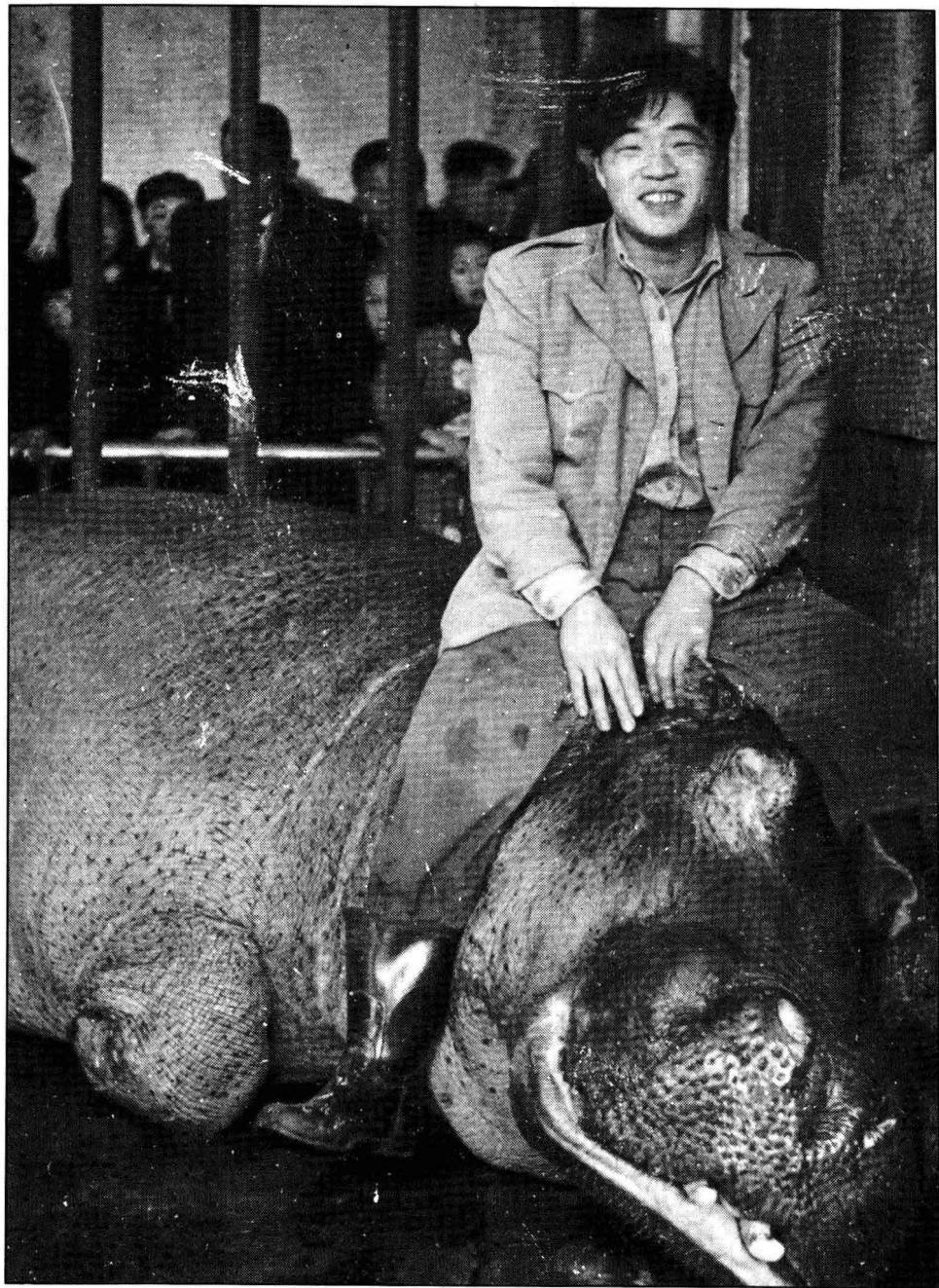
カバとの出^で会^あい

アフリカからたくさんの動物^{どうぶつ}たちがやつてきた。動物園はとつてもにぎやかになった。ボクはキリンやシマウマなどを、夢中^{むちゆう}で見たまわった。カバの夫婦のところへやつてきた。そして、つくづくながめていたら、ボクにピピッと電流がながれた。

「カバってすてきだなー。オレ、ライオンなんかやめてカバを飼^かってみたいなー。いや、ぜったいにカバをやりたい」

どうしてって？ カバって、とても豊^{ゆた}かで、ボクごのみなんだ。人がなんといつたって、カバはすばらしい。

そんな気持^{きもち}ちが日ましにつのっていくのである。もうがまんできなくなつて、古^こ



アフリカから来たばかりのデカオ。ボクが着ている作業服は中古の進駐軍服である。

賀園長がえんちやうのところへ行っておねがいした。

「ボクにカバを担当たんとうさせてください」

「キミはライオンをやる予定よていではなかったのかね」

もともと、クレメンツとの出會であいがあって、ボクはライオンの飼育係しいくがりをやることになっていた。

「そうなんですが、カバを見ているうちに、ボクは、あのー、カバが大好きだいすになつたんです。ですから、ボクをカバの飼育係しいくがりにしてください」

そんなふうに、園長えんちやうにごういんにたのみこんだ。園長えんちやうは、ニガ笑わらいされていたが、最後さいごには、ゆるしてくれた。

「それでは、カバとサイの飼育係しいくがりをやるか。厚皮獸こうひじゆうの飼育しいくはたいへんだからが
んばりたまえ」

「ハイッ」

ボクは園長室えんちやうしついっぱいひびきわたるような声で返事へんじをした。

厚皮獸こうひじゆうというのは、カバ、ゾウ、サイなど、厚あつくてかたい皮ひふにまもられた動どう